

序. 今回から3回に分けて聖餐式をテーマにお話させていただこうと思っております。

聖餐式は、教会の歴史の中や聖書や神学の観点から見て、とても重要な意味を持つものですが、同時にクリスチャンでない人は、その表面的な部分にばかり目が向いて、ちょっと滑稽に見えるようですね。「大の大人がパンとぶどうジュースをありがたそうに食べたり飲んだりしている。大人のままごとみたいだね」と冗談半分に言われたことがあります。

クリスチャンの場合はそんなふうに考える人はいないでしょうけれども、逆に熱心になりすぎて、聖餐式が偶像礼拝的になりやすいとも言われます。中世のカトリック教会においては、トマス・アキナスの「実体変化説」というのが誤解されて、神父が聖別の祈りを捧げると、パンとぶどう酒が本当のキリストの肉と血に変わると信じられていましたから、聖餐のパンを食べると病気が治るとか、聖餐に与ると徳を積むことになるとか、この世的なご利益があるとか、逆にそれにあずからなければバチが当たるとか地獄へ行くなどと考えられたりした歴史があります。ですから、聖餐式がどういう意味を持つのかを正しく理解することは、とても大事なことだと言えます。

しかし、一口に「聖餐式」と言いましても、それはいろんな角度からの捉え方が可能です。例えば一つにはユダヤ教との繋がりからの捉え方があります。ご存知の通り聖餐式はイエス様と弟子たちとの＜最後の晚餐＞が起源となっているものですが、あの最後の晚餐は「過越の食事」という、ユダヤ教の伝統的食事の場だったわけですね。

つまり、イエス様はそれまで弟子たちが見たことも聞いたこともないような儀式を突然、勝手に始めたのではなく、それまで「過越の食事」として守られて来たものを用いて、それに新しい意味を与えたと言えるわけです。ですから、その「過越の食事」がどういうものだったかを知ることが、聖餐式の理解には必要だという捉え方が一つできます。

それから聖餐式には「感謝」という側面もあります。欧米では聖餐式のことをユーカリスト（Eucharist）と呼ぶことがあるのですが、ユーカリストというのはギリシャ語のユーカリストー（感謝する）という動詞、あるいはユーカリスチア（感謝）という名詞から出て来たものですので、神様に感謝を捧げるという面があるのです。先ほど今日の聖書箇所を読んだルカ福音書の記事（22:17）の最初のところにも、「イエスは感謝の祈りを捧げてから」と書かれていました。ですので、神様に感謝を捧げるという面から聖餐式を捉えることも大事なのです。

さらには、聖餐式は「最後の晚餐」という食事の場が起源となっていますので、「主の食卓」（the Lord's Table）という角度からの捉え方も考えられます。イエス様は弟子たちと何

度も食事をされたのですが、イエス様と囲む食卓というのは、イエス様が弟子たちを教える場でもありましたし、励ます場でもあり、弟子としての一体感を確認する場でもあったわけです。そのような食卓という観点から聖餐式の意味を学ぶことも大事です。

さらにまた、聖餐式は「パン裂き」(Breaking Bread)と呼ばれたりもするのですが、それは使徒の働き2章でペンテコステを経験した直後の弟子たちの姿が描かれたところに、「彼らはいつも、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈りをしていた」(使徒 2:42)と出て来るところからの命名だと言えますが、このパンを裂くという行為は、さらに遡ってあのエマオの弟子たちの経験を思い出させるものです。復活されたイエス様との出会い。夕食の席でどこの誰かよくわからない人がパンを裂いた瞬間、それがイエス様だと分かったというあの経験ですね。ですので、聖餐式が「パン裂き」と呼ばれる場合には、復活されたイエス様との出会いという側面が強く意識されることになります。

ということで、聖餐式は多様で豊かな意味合いを持っているものですから、今回からの3回でそれら全部をお話することはとてもできませんので、今申し上げたいいろいろな側面についての具体的な学びはまたいつかの機会に譲ることにしまして、これからの3回シリーズでは、聖餐式が偶像礼拝的にならないように、形式主義的にならないように、聖餐式を考える時の考え方のポイントとなるような事柄のみに集中してお話することにいたしました。

第一回目の今日は、アイコンとアイドルの違いということ。今日はこれを重点的にお話しますので、詳しいことは後に譲ります。

第二回目は、聖書における言葉遣いとして、シンボリック・リアリズムとシンボリック・フォーミズムの違いということです。言葉をどのように使うのか。これは私たちが普段あまり気にしていないことなのですが、大変大きな事柄なのです。シンボリック・リアリズムという言葉遣いは、論理的な物の考え方を表す時に使われる言葉遣いで、科学・技術や情報伝達、法律という分野で仕事をする時の言葉遣いです。これは「言葉で世界を記述する」という考え方に基づく言葉の使い方だとも言えます。

もう一つの理解の仕方で、シンボリック・フォーミズムというのは、文学的な世界での言葉の使い方で、「言葉によって人の心の中に世界を形作る」という考え方に基づく言葉の使い方です。

この二つの違いをわかりやすく示す例を申しますと、「雪が溶けたら何になりますか？」と質問された時、「雪が溶けたら水になる」という答え方と、「雪が溶けたら春になる」と答え方が考えられますね。「雪が溶けたら水になる」という文はシンボリック・リアリズムという言葉遣いです。因果律で捉えられる事柄ですね。実験室でも再現できる。誰がいつ

どこでやっても再現が可能な事柄を言っています。

それに対して「雪が溶けたら春になる」という文はシンボリック・フォーミズムで、これは因果律の話ではありません。実験室でビーカーに雪を入れてアルコールランプで下から温めて溶かしても、そこに春は来ませんからね。これはその文を聞いた人の心の中に世界を描かせる言葉の使い方です。

この二つの言葉の使い方の違いを理解しないと、聖書の言葉遣いも正しく捉えられないし、聖餐式で用いられる言葉も理解できないことになるのです。詳しくは次回お話ししますので、ちょっとお待ちいただきたいと思います。

第三回目は、物語という文学形式が持つ意義の深さということです。物語は今申し上げたシンボリック・フォーミズムの形態の一つでもあるわけですが、不思議なことに、聖書は真理の書と言われますが、真理命題文の羅列で書かれているのではありませんね。真理命題文というのは、「A は B である」という形式の文です。これは先ほど申し上げたシンボリック・リアリズムという言葉遣いに当たるとも言えるのですが、例えば、聖書はこんな感じに記述されていてもおかしくないのです。

1. 神は天と地の創造者である

1.1 天とは天的世界である

1.1.1 天的世界とは霊的な世界、すなわち数式や化学式による記述対象にならない世界である

1.1.2 地とは地的世界である。すなわち時空間に支配され、数式や化学式で記述可能な世界である

1.2 創造とは無から有を生じさせるわざである

1.2.1 創造はことばによるわざである

1.3 神のみが創造者である

1.3.1 神のことばによる宣言はその通り現実化する

真理を伝えるのが使命であれば、聖書はこんなふうに書かれていてもおかしくないのですが、聖書はまったくこんなふうにはなってないですね。多くの部分が物語形式です。どうしてそうなっているのか。それは物語という形式が持つ豊かな力が関係しているのです。

たとえば「あなたは誰ですか？ ちょっと詳しく自己紹介してください」と言われると、「私の名前は～で、両親は～と～で、どこでいつ生まれて、どこで育て、どんな学校へ行って」と話したりするでしょう。それは、自分の物語を喋ってるんですね。自分の人生を考えても、自分は誰だろうと考えても、気付かないうちに私たちは自分についての「物

語」を作っているものです。これは実は人間に限らないんですね。教会の紹介にしても、自分が持ってる車の紹介にしても、何でも、「それが何であるか」を詳しく理解しようとすると物語になる。そういう意味で、聖餐式が偶像化されないために大変大事なのは、その背後にある物語を知ることだと言えるわけです。

以上のような三つの事柄に絞ってお話することで、聖餐式を正しく捉えていくための道標を提供できたらと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

本論

さあ、それで今日お話する「アイコンとアイドルの違い」ということなのですが、これは聖餐式に限らず、私たちが偶像礼拝者とならないために、大変大事なポイントとなりますので、一連の話の最初にどうしても確認しておかなければならない事柄です。

1. 「アイコン」と「アイドル」の違い

ではまず、アイコンとアイドルという言葉ですが、新約聖書には「形あるもの」を意味するギリシャ語が二つあります。εἰκών エイコーンと εἰδωλον エイドーロンです。エイコーンは英語のアイコンの元になった言葉で、エイドーロンはアイドルという言葉の元になった言葉です。

で、この「アイコン」も「アイドル」も、両方とも「形あるもの」を意味する点では同じなのですが、「アイコン」(エイコーン)というのは、本当に大事なもの(それはキリスト教信仰の枠組みで申し上げますなら、たとえば神様の属性に属する事柄、愛・真理・善・美・正義・平和・永遠・真のいのちなどですが)、それらの本当に大事なものの「接点」「接触点」(A point of contact)として機能する「形あるもの」を指す言葉で、聖書では肯定的な意味で用いられます。

愛・真理・善・美・正義・平和・永遠・真のいのちなど、これらは何か具体的なものがないと、自分が理解したり人に伝えたりすることができないものです。例えば小さい子どもから「美って何？」と聞かれたらどう答えるでしょうか。「美は美だよ」と言っても伝わらないし、いくら大声で「美～！」とか叫んでも分かってもらえませんね。そういう時私たちは「美っていうのはね、ほら、お花を見たり、蝶々を見たり、お空の虹を見たりすると、『綺麗だなあ』って思うでしょ。それを美って言うんだよ」というふうに答えるしかないわけですね。そういうふうにして、本当に大切なものを知るための接点となる具体的な形あるもののことをアイコンと言うわけです。

「愛って何？」と聞かれたらどう説明しますか？ 「愛は愛だよ」と言っても伝わらないですね。いくら大声で「愛～！」と叫んでも伝わりません。「愛っていうのはね、優しい言葉をかけるとか、褒めてあげるとか、贈り物をするとか、一緒に時間を過ごしてあげる

とか、お手伝いをするとか、ハグしてあげるとか。そういうことをしてあげることで、『ああ嬉しいなあ』『幸せだなあ』と思わせてあげることを『愛』って言うんだよ」というふうに、具体的な事柄を通して「愛」という抽象概念を伝えるわけですね。その本当に大事な抽象的な事柄との接点になる具体的なもの。それをアイコンというわけです。

贈り物そのものが愛なんじゃありません。贈り物などは下手をしたら賄賂になってしまいます。ハグそのものも愛なんじゃありません。私みたいな変なおじさんがいきなりハグしたら、セクハラにしかならないでしょう。ですから、それぞれ具体的な物や行為が焦点になるんじゃない。それを通して本当に大切なもの（この場合は贈り手の愛ですが）に触れられるかどうかが大変なわけです。

そのように機能する具体的な形あるもの。それをアイコンと言いまして、聖書では肯定的な意味で用いられるもので、ひらがなで「かたち」と訳されています。

一方の「アイドル」(エイドーロン)はそれ自体が所有や礼拝の対象となったりするもの。最終関心事となる「形あるもの」を指す言葉で、聖書では否定的な意味で用いられて、「偶像」と訳されます。先ほどの「愛」の例で言いますなら、良い言葉をかければ愛を伝えたことになると思い込むこと。贈り物をすれば愛を伝えたことにあると思い込むこと。それらは言葉や贈り物をアイドルとしてしまっていることになるわけです。

2. 「アイコン」「アイドル」が用いられる聖書箇所

では、エイコーンとエイドーロンが登場する聖書箇所を確認しておきたいと思います。

1) エイコーン（アイコン）が用いられている箇所

「アイコン」という言葉の語源になっている「エイコーン」というギリシャ語が示す肯定的な意味での「かたち」というのは、以下のような箇所に見られます。

創世記 1:27 神は人をご自身のかたち（エイコーン）として創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。

コロサイ 1:15 御子は、見えない神のかたち（エイコーン）であり、すべての造られたものより先に生まれた方です。

コロサイ 3:9 互いに偽りを言ってはいけません。あなたがたは古い人をその行いとともて脱ぎ捨てて、

3:10 新しい人を着たのです。新しい人は、それを造られた方のかたち（エイコーン）にしたがって新しくされ続け、真の知識に至ります。

これらの「かたち」と訳されているところが「アイコン」(エイコーン)という言葉です。人は神の「かたち」に造られ、キリストは神の「かたち」であり、救われた者は造り主の「かたち」になるということです。ですから、「かたち」(アイコン：エイコーン)という言葉は、とても重要な鍵となる言葉であることがお分かりいただけると思います。

私たちが「人間とは何か」を考える場合も、「イエス様はどなたか」を考える場合も、「救われた者はどんな存在なのか」を考える場合も、「アイコン」(エイコーン)という言葉はとても大事な鍵になっているのがお分かりいただけると思います。

2) エイドーロン (アイドル) が用いられる聖書箇所

一方、否定的な意味での「かたち」を表すエイドーロンは、先ほど申しましたように、聖書では「偶像」と訳されるんですけども、それが用いられているのは次のような箇所です。

出エジプト 20:4 あなたは自分のために偶像 (エイドーロン) を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、いかなる形をも造ってはならない。

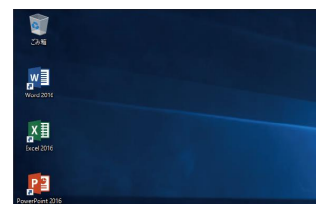
レビ 19:4 あなたがたは偶像の神々 (エイドーロン) に心移してはならない。また、自分たちのために鋳物の神々を造ってはならない。わたしはあなたがたの神、主である。

1 コリント 8:4 さて、偶像 (エイドーロン) に献げた肉を食べることについてですが、「世の偶像の神 (エイドーロン) は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」ことを私たちは知っています。

ここで「偶像」とか「偶像の神々」と訳されているのが「エイドーロン (アイドル)」です。否定的な意味であることがお分かりいただけると思います。

3. アイコンの機能

さてそれで、「アイコン」とは「接触点」として機能するものだということを先ほど申し上げたのですが、それを理解するのに一番わかりやすい例が、コンピューターで使われる「アイコン」の機能だと思います。コンピューターのデスクトップ (ディスプレイ画面) には様々な「アイコン」と呼ばれる小さな絵 (エンブレム) がありますね。縦横 1 センチくらいの画像で、



それをクリックするとそれに対応したソフトが起動するようになっています。

例えば、ワードを使って文書を書きたいと思えば、ワードのアイコンをクリックします。すると文書が書けるソフトが動き始めて、その世界に入っていくことができます。つまり、アイコンは本体プログラムの一部ですが、そのアイコン自体が大事なのではなく、本体プログラムとの接点として機能するものです。本体プログラムの一部として本体プログラムと一体でありながら、そのアイコン自体に人を引き留めるのではなくて、本体プログラムの世界に人を導いて、その本体プログラムの世界で活動することを可能にする。それがアイコンの務めです。

この辺り、イエス様が父なる神様とその本質において一つ・一体であるということ。そして同時に、イエス様自身に人を引き付けるのではなく、本体である神様ご自身の世界に人を導くことを使命としておられるということとのつながりをご理解ください。

アイコンのデザインはいろいろ変わりますが、アイコンが本体プログラムとの接点だということだけは変わらないのです。ワードのアイコンをクリックしたらエクセルが動き出したということになったら大変なわけです。

ちなみにワードのアイコンは、今までこんな感じで変化しています。2007 年、2010 年、2013 年、 2018 年と、結構変わっていますね。アイコンというのは、デザインは問題ではないのです。それがワードプログラム本体とそれを使う人とをつなげる接点であるということが、何より大事なわけです。

この点も、イエス様の顔かたち、風貌などが聖書で何も語られていないし、それを問題にする必要もないということとのつながりをご理解いただけたらと思います。

4. 「アイドル」の場合

「アイコン」というものはこういうものですが、一方、「アイドル（エイドーロン）」は、それ自体が最終的な所有対象物、最終的関心事として扱われるものです。

日本語で「アイドル」というと人間についてしか用いないですけれども、聖書の「アイドル（エイドーロン）」という言葉は、人にも物にも用いられます。そして、アイコンが「接点」だとするなら、アイドルというのは「対象物」です。人であっても物であっても、それを自分が操れる「物」として、あるいは自分の所有物のようにして取り扱う対象。それが「アイドル」です。

一番良い例は、テレビや雑誌などに登場するアイドルをそのファンがどのように扱っているかを見れば、「アイドル」という言葉が持つニュアンスがわかると思います。ファンにとってアイドルは追っかけの対象であり心理的(ひどい場合には物質的)所有の対象です。

アイドルの顔かたち、声、居場所、全てがそのファンにとっては興味の対象で、その人以外には目もくれず、その人を所有したいとさえ思うものです。アイドルが物である場合は、それを所有していれば幸運が舞い込むとか、それに触れればすぐに病気が治るというように、物自体が力を持つものだと考えて接することになります。

で、聖書はこの「アイコン」と「アイドル」の区別ということを非常に巧みに用いて、私たちに大切な真理を語り伝えるのです。先ほど引用した聖書箇所が語っていましたように、人間はその存在その創造の時から神のアイコンとして造られたし、キリストも父なる神のアイコンだし、人が救われるとキリストのアイコンが人の内に形作られていくのだと語っているわけです。

逆の言い方をしますと、聖書は、「すべて形あるものをアイドルにするな」と言うのです。人間をアイドルにするな。イエスをアイドルにするな。聖餐式も洗礼式も牧師も教会も、それ自体が最終目的物（アイドル）になってはいけない。救われた人間が集う教会もアイドルにするなということを語っているということです。すべて、人間もイエス様も教会も聖餐式も洗礼式も牧師も、全て霊である父なる神様の愛や正義や真理、永遠のいのちなどを見出す接触点として、アイコンとして考えなければならないということです。

5. イエスはアイドル（しがみつく対象）ではない

聖書を見ますと、イエス様でさえしがみつく対象として見てはならないことが示されているのがわかります。例えば、復活の日の朝、空っぽの墓を前にして涙に暮れていたマグダラのマリアに、復活したイエス様が後ろから声をかけた場面。そのところでイエス様は、ご自身にしがみつこうとしたマグダラのマリアにはっきりと「わたしにすがりついてはいけません」とおっしゃいました（ヨハネ 20:11-17）。

エマオ途上の弟子たちの経験も、思い出されるでしょう。イエス様が十字架を見て落胆した二人の弟子が、エマオの村に歩いて帰っていると、途中から誰か見知らぬ男が合流して来て、キリスト復活の話をする。奇妙なやつだと思いながら村についた頃には夕方になっていたので、「一緒に食事を」ということになり、食卓についてその男がパンを裂いた瞬間、それがイエス様だとわかった。しかし、その次の瞬間にイエス様は消えてしまったと書かれています（ルカ 24:30-31）。

「わたしにすがりついてはいけません。」——イエス様でさえ、私たちがすがりついたりしがみついたりする対象物・偶像・アイドルにしてはならないというのが、聖書のメッセージなのです。

イエス様ご自身の言葉で、それを確認しましょう。

ヨハネ 5:24 まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。

ヨハネ 10:9 わたしは門です。だれでも、わたしを通して入るなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。

ヨハネ 14:9 イエスは彼に言われた。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。

ということで、アイコンとアイドルの違いというのは、以上のようなことで、イエス様をアイドルにしてはならない。イエス様をアイコンとして、イエス様を通して父なる神様、目には見えない霊なる存在である創造主なる神様にしっかり繋がること。父なる神様との交わりの世界に入っていくことこそが大事なのだということを覚えていただきたいわけです。

6. 聖餐式とアイコン

さてそれで、そのことを聖餐式に当てはめて申しますなら、パンとかぶどう酒とかをアイコンとして扱うのはいいが、アイドルとしてしまっただけではいけないというのが聖書のメッセージだと言えるわけですね。聖餐式で用いられるパンとかぶどう酒とかを、それ自体で何かありがたい物体のように理解するのではなくて、それらを本当に大切なものとの接触点として理解する。それが大事だということです。

では、聖餐式の場合その「本当に大切なもの」というのは、何でしょうか。イエス様は最後の晩餐の席で、「わたしを覚えてこのようにしなさい」とおっしゃいました。ですから聖餐式は、その場に現在されるキリストとの交わりの経験ということが大事なわけですね。

しかし、一口に「現在のキリストとの交わり」と言っても、何をもって交わりと言えるのか難しいところではないでしょうか。まさかキリストの肉片や血液と交流するわけではないです。パンとぶどう酒は、言うまでもなくキリストの肉片と血液のことではないわけです。

現在のキリストとの交わりというのは、私たちのために死んで復活されたキリストとの人格的交わりです。ですから、パンとぶどう酒を接触点として、キリストの人格に触れるということができないと聖餐式が偶像化されかねないということになります。

ところが、「人格」というのがまたこれが抽象的です。人格そのものは見たり触ったりする物体ではないからです。白石剛史の手とか白石剛史の鼻とか白石剛史の胸とかは指し示しますし、差し出せますが、白石剛史の人格というのは差し出せません。そしてまた、その人格というのは固定されてもいません。人は変化するからです。

ということで、パンとぶどう酒を接点としてキリストと人格的交わりを持つということとは、決して単純なことではないのです。パンやぶどう酒そのものが大事なのではない。それを接点としてキリストの人格と交わる。それが聖餐式です。

人格というものは、心で見るもの。人がイメージしていくことによって初めて捉えることができるものです。例えば、人間の肉体は人格との接点ですから、白石の体は白石という人格を知る上で大きな要素ではあります。しかし、それは白石の人格そのものとイコールではありませんね。

「白石さんはどこにいますか？」と聞かれたら、「はい、ここです」と私は手を挙げます。しかし、「それはあなたの手でしょ？」とか言われたりするかもしれません。自分の鼻を指差して「これが俺だよ」と言っても、自分の胸を叩いて「ここにいますよ」と言っても、「それはあなたの鼻でしょ」「胸でしょ」などと言われる。まあ、もちろん実際にはそんなことは「ボケとツッコミ」みたいなことでしかありませんが、いずれにしても、私は「白石剛史の何か」を見せたり差し出したりすることはできますが、白石剛史の人格そのものは指差せませんし、差し出せない。人格は心でイメージして捉えられていくものなのです。

ですから、例えば私が手を失ったら、白石剛史でなくなるでしょうか。そうではないですね。足を失ったら白石剛史でなくなるでしょうか。そうではないですね。人の外見は変わりますが、その人そのものがなくなってしまうわけではない。そしてもっと極論して、この肉体全部がなくなったら白石剛史という人格は存在しなくなるのか。

聖餐式において臨在されるのは、イエス・キリストの人格（ペルソナ）であって、その人格と私たちは交わりをする。パンはイエス様の肉片ではないし、葡萄酒はイエス様の血液ではない。当たり前のことですが、それが忘れられてしまうことがあるのです。

またこの一連のメッセージで取り扱うことになりますが、教会の歴史上、「パンとぶどう酒がどういう意味でキリストの体と血なのか」という議論がずいぶんなされて来ましたが、下手をすると、それは私たちが聖餐式で持つキリストとの交わりが、あたかもキリストの肉片や血液との交わりであるかのような誤解に基づいたものになってしまっていたと言えます。

ということで、形あるものをアイコンとして扱うということは、どれほど強調しても強調しきれないほど大切なことなのです。

7. 全ての形あるものはアイドル（偶像）化されてはならない

信仰生活全般についても同じことが言えます。私たちの周りにある五感で感じるものは、すべてがその本質との「接点」としてのみ尊い意味を持つことに気づかなければなりません。『聖書』という本も、目に見えない「神のことば」との接点ですね。『聖書』は燃やせば無くなりますが、たとえ聖書を燃やしても「神のことば」は滅びません。私たちは『聖書』を接点として、神の言葉の世界に触れるのです。

聖餐式同様に、洗礼式も聖なる経験との接点として意味あるものであって、それ自体が聖なるものではないのです。洗礼式の水が人をきよめるわけではないですし、人を救うわけではありません。

礼拝にしても、会堂にしても、その他ありとあらゆる目に見えるもの全てが、アイコンとして機能する限りにおいて意味あるものであって、アイドルにしてしまっただけとはいけません。

牧師は、羊飼いなるキリストのアイコンとして見られるべきであって、キリストご自身ではありません。牧師は死んでも、教会のかしらであるキリストは生き続けます。礼拝形式が神聖なのでもないし、会堂が神聖なのでもありません。そして、これから学んでいく聖餐式も、その儀式やそこで用いられるパンとぶどう酒そのものが神聖なのでもありません。

8. アイドルよりもアイコンになれば素晴らしい

若い人たちによく言うんですけれども、アイドルになろうとして生きるんじゃなくて、アイコンになれるように生きてください。アイドルになろうとするというのは、自分に人の目が集まることばかり考えて生きることです。自分が華やかなスポットライトを浴びること。注目されること。評判になることばかり考える。

それに対してアイコンになろうとする人は、自分の外に存在する素晴らしい世界を憧れを持って見つめていて、その素晴らしさに人が結びついていくことを喜ぶ人です。

アイドルとして生きようとするは大変です。常に人の目を集めないといけませんから、若作りにしたり、話題を提供したり、評価・評判を高めたり、とにかく気が休まらない。自分以外の人注目されたり、自分より高い評価を受けると嫉妬心が湧いて仕方がない。そういう生き様になります。

しかし、アイコンとして生きる人は、自分にではなく、自分が憧れている素晴らしい世界、自分が憧れている素晴らしいお方に人の目が向くと、自分も一緒になって嬉しくなる。一緒に喜べる。そういう器となります。将棋の藤井聡太さんとか、野球の大谷翔平とか、海洋生物学者のサカナくんとかがそんな感じでしょうか。

形あるものは全てアイコンとして機能する時にその意義を発揮する。このことをぜひ忘れないでいただきたいと思います。そして、形あるものを通して、本当に素晴らしい世界、本当に崇めるべきお方に目が向くように生きていただきたいと思います。

2 コリント 4:18 私たちは見えるものにではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。

本当に大事なものは、目に見えないんですね。目に見える「形あるもの」に囚われたり振り回されたりするのではなく、「形あるもの」を通して、目に見えない永遠の価値があるものに目を向ける。それが大事なのです。

ヘブル 11:1 さて、信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるものです。

聖書では、目に見えないものを見ることを「信仰」と言うのですね。形あるものを通して、常に見るべき本質に目を向ける。「目に見えない本質を見つめて生きる」という「信仰」を失わずに信仰生活を進めていただきたいと思います。

今回はこれから聖餐の意味について学んでいく最初に当たりまして、物事の考え方についてお話してまいりました。「自分は聖餐式という形あるものを通して何を見ているのだろうか。見るべきものを信仰の目を持って見ているだろうか。」そのことをご自身に問い直すきっかけとしていただけたら幸いです。